

# 博学連携を推進しています

## ●博学連携による教育的効果を

当館と学校が連携・協力する中で、子どもたちの教育を充実させることが期待できます。当館にある歴史に関わる様々な展示資料や古墳群を楽しく興味をもって学習することができます。歴史・文化に関する具体的な事物・本物にふれられることは、学習内容をより深く豊かに理解することや、より関心をもつことにつながると考えられます。「新やまなしの教育振興プラン」においても、基本理念・目標を達成するための基本方針として博学連携の推進をあげています。

## ●考古博物館で臨地研修をしませんか

考古博物館では、県内各地から出土した遺物、約1,900点(一部レプリカを含む)を常設展示しております。また、周辺には弥生時代の方形周溝墓群や古墳時代に造られた甲斐銚子塚古墳(前方後円墳)・丸山塚古墳(円墳)をはじめとする数多くの遺跡が存在します。

日頃は、児童・生徒への指導でなかなか遺跡や遺物の見学等ができないかと思いますが、夏休みなどに臨地研修を予定している研究会や団体等がございましたら、是非考古博物館にご来館ください。また、授業をする上での疑問や山梨県の遺跡や遺物などに関する質問等がございましたら、遠慮なくお問い合わせください。

※ご希望に応じて、火起こし体験などの各種体験教室にもご参加いただけます。(要相談)

## ●職業体験・インターンシップの受け入れをしています

考古博物館では、山梨県埋蔵文化財センターと共同で、中学生の職業体験・高校生のジュニアインターンシップの受け入れをしています。博物館や学芸員、発掘などの作業等に興味のある生徒がございましたら、是非お勧めください。なお、当館休館日中を除いて随時受け入れております。ご相談ください。また、史学系への大学進学希望の生徒のインターンシップも受け入れています。より実践的な内容で親切・丁寧に指導します。



## ●古代衣装の貸し出しをしています

古代の貫頭衣をはじめ高松塚古墳壁画に描かれた女官の服など5種類(3セット)を製作しました。社会科の学習だけでなく、家庭科の学習、文化祭、学習発表会等にも是非ご活用ください。

- 貫頭衣かんとうい…弥生時代から古墳時代の服。
- 胡服こふく…主に古墳時代の豪族や武人の服。
- 巫女の服みこ…まじないや祭祀などを司っていた巫女と呼ばれる女性が着ていた服。
- 女官の服にょかん…高松塚古墳の壁画に描かれた朝廷に仕える女性が着ていた服。
- 官吏の服かんり…高松塚古墳の壁画に描かれた朝廷に仕える男性が着ていた服。





# 展示解説

当館の常設展示室は、旧石器・縄文・弥生・古墳・歴史の5つの時代ごとに、山梨の歴史や文化のようすを展示しています。本書ではこの常設展示に30のテーマを設定しました。各テーマごとに、展示内容・見学の視点およびその解説をまとめました。解説には、学校見学時により役立つように、実際に展示してある遺物や遺跡などについてできるだけ具体的に取り上げるよう心がけました。学年や学習の進度に応じ、博物館見学の際の事前指導や、引率なされる先生方の予備知識として役立てていただければ幸いです。

なお展示替え等のため、展示内容が変わる場合がありますので、児童・生徒が来館する前に、できるだけ下見などをしてご確認ください。



縄文時代のコーナー



古墳時代のコーナー

## 1. 人類の出現

※現在これに関する展示はありません。

人類が出現したのはアフリカ大陸です。今から約 700 万年前と言われていています。ヒトの定義は、2 足歩行する霊長類ということです。初期の人類は現生のチンパンジーと身長や脳の容積はほとんど変わりませんでした。最古の人類は一般的に「猿人」と呼ばれています。今を生きる私たちは、生物学ではホモ属・サピエンス種という学名をもっていますが、猿人の仲間にはアウストラロピテクス属をはじめ複数の属に分類された化石が発見されています。おおよそ 250 万年前頃にはホモ属が出現したとされ、同時に石器も使用されはじめました。180 万年前頃、体格や脳容積などが現代人とほぼ同じの「原人」(モホ・エレクトス) が現れ、100 万年前頃までにアフリカ大陸を出て東アジアや南ヨーロッパに達したとされています。ジャワ島のピテカントロプスや中国のシナントロプスは、ホモ・エレクトスの仲間とされています。中国の周口店遺跡やハンガリーのベルテスゾロスの遺跡では 50 万年前頃の焚き火の跡が発掘されています。50 万年前頃、エレクトスとサピエンスの中間的な特徴をもつ『旧人』(古代型ホモ・サピエンス) が現れます。ヨーロッパだけにいたネアンデルタールも含まれます。そして、20 万年前頃に現代人と同じホモ・サピエンスである『新人』(現代型ホモ・サピエンス) が登場します。しばらくは、古代型ホモ・サピエンスとともに暮らしていましたが、3 万年前頃には現代型ホモ・サピエンスが地上唯一の人類となりました。

私たちの祖先である最古の日本人はどのようなヒトだったかについては、これから解決していかなければならない課題です。これまでに発見された旧石器時代人骨は、沖縄県出土の港川人(1 万 8 千年前頃)<sup>やましたまちだいいちどうけつじん</sup>や山下町第 1 洞穴人(3 万 2 千年前頃)<sup>しずおかけんはまきたじん</sup>、静岡県浜北人があげられる程度です。先の人骨は石器がみられませんが、各地から出土した石器からみると、今のところ 4~5 万年頃のものが最古とされ、3 万年前頃からの遺跡は各地で発掘されています。現在の日本人は、朝鮮半島や南西諸島から移り住んできた人類をベースに、北方からの人類の流入や、弥生時代以降の朝鮮半島などからの人類の流入により変容などを変化させながら、アイヌの人々や琉球人を含む現在の日本人が形成されました。



局部磨製石斧 横針前久保遺跡 (北杜市)



石器 横針前久保遺跡 (北杜市)

## 2. 旧石器時代の生活

### 見学の重点

旧石器時代の人々の生活用具は、おもに石製の石器が中心です。石槍いしやりを使った狩りや生食できる木の実などで生計をたてていました。万年単位の長く続いた時代の中で、人々がさまざまな石器を作り、工夫を凝らして生活していたようすを、オオツノシカの狩猟の場面を描いたパネルや気温の変化などを盛り込んだ年表などで紹介しています。

日本列島にいつからヒトが住むようになったのかは、いまだに研究途上です。10万年を遡るとされるような遺跡もいくつか発掘されていますが、異論が出されており確定していません。今のところ確実なのは4～5万年前頃の遺跡で、3万年前頃からの遺跡は列島各地で発見されています。アフリカ大陸で石器が使われるようになった250万年前以降を旧石器時代と呼びますが、日本列島ではヒトが住み始めてから、土器が使われるようになる1万5千年前頃までを日本旧石器時代(「先土器時代」、「岩宿時代」などの呼び方もある)と呼びます。石を打ち欠いて作った打製石器が中心ですが、日本列島では刃を磨いた石器「局部磨製石斧きょくぶまぜいせきふ」が見られるのが特徴です。1949年の群馬県岩宿遺跡の発掘がきっかけとなり、今では1万か所を超える遺跡が発見されています。なお、その年代の決め手である炭素14年代測定法に実年代(暦年)との誤差があることが発見され、その誤差を計算すると炭素14年代よりも数千年ほど古くなることが分かってきており(暦年較正年代)、近い将来、縄文時代の始まりの年代が1万6千年前頃となることでしょう。

山梨県では、3万年前頃の立石遺跡たていし(甲府市)や横針前久保遺跡よこはりまえくぼ(北杜市長坂町)・一杯窪遺跡いっぱいくぼ(都留市)が発掘されており、横針前久保遺跡では山梨県内で唯一の局部磨製石斧も発見されています。

旧石器時代は石槍で狩りをしました。その対象はシカなどが中心だったと思われそうですが、ほかにも今では絶滅してしまった大型哺乳類などが狩りの対象となっていたでしょう。実際に山梨県内から化石が発見されたわけではありませんが、日本列島にはこのほかにも、ナウマンゾウ、ニホンジカ、ヒグマ、オオカミなど、本州北部ではバイソン、トナカイ、ヘラジカ、北海道にはマンモスゾウも住んでいました。県内では山梨市兄川と甲府市相川の2カ所の河床で、ナウマンゾウ化石が発見されています。見通しのきく草原が広がり、人々は動物のむれに風下から迫り、槍を投げ付けて獲物を捕らえていました。周囲の樹林は、現在では比較的高い山のなかに生えているモミ、ツガ、トウヒといった亜寒帯樹林です。このように、日本旧石器時代は現在よりも相当寒く、2万年前頃は年平均気温が7度も低かったと言われます。180万年前以降は、更新世こうしんせい(洪積世・氷河時代)と呼ばれ、4～8万年の周期で、寒冷な氷期と温暖な間氷期が繰り返しています。氷期には厚さ3km以上の大陸氷河がヨーロッパや北アメリカの北半部を覆いました。

旧石器時代の主な食べ物は、マツの実、クルミ、ハシバミなどの生で食べられる木の実や植物、ナウ

マンゾウ、オオツノシカ、ニホンジカなどのけもの肉などです。人々は居住地を転々とする移動生活をしていました。旧石器時代の人々は台地や高原地域に好んで住んでいました。イエそのものが発掘された例はほとんどありませんが、たぶん動物の皮などを利用して作った簡単なテントをはって生活していたのでしょう。衣服については、3万年前頃のロシアの旧石器時代遺跡のお墓から、クツやズボン・長袖・フードの様子がわかるおびただしい数の骨製のビーズをつけた人骨が発掘されています。寒い時期なので、たぶん動物の毛皮を利用して衣服を作っていたのではないのでしょうか。



狩りのようす

### 3. 旧石器時代の石器と礫群<sup>れきぐん</sup>

#### 見学の重点

このコーナーには、まだ土器を使い始める以前の旧石器時代の人々が使っていた石器と礫群が展示されています。礫群は、山梨県南端の南部町にある万沢小学校で、校庭を広げる工事の時に見つかったもので、まわりをコンクリートで固め、下に鉄板を入れて運んできて展示してあります。旧石器時代の人々が調理活動をしていた跡と考えられています。

- ①旧石器時代の人々は、動物の肉や木の実などの食べ物をどんな方法で調理して食べていたのでしょうか。旧石器時代の人の台所だと考えられている天神堂遺跡の礫群を見て考えてみましょう。
- ②それぞれの石器は何に使われたのでしょうか。
- ③石器はどのような方法で作られたのでしょうか。

旧石器時代の遺跡である横針前久保遺跡<sup>よこはりまえくぼ</sup>（北杜市長坂町）、立石遺跡<sup>たていし</sup>（甲府市）、天神堂遺跡（南部町）、縄文時代草創期<sup>そうそうき</sup>の丘の公園 14 番ホール遺跡（北杜市高根町）の石器を展示してあります。石器の材質は、黒くてキラキラしているのが黒曜石、黄白色のものが泥岩<sup>でいがん</sup>、薄緑色が珪質頁岩<sup>けいしつげつがん</sup>、黄色が碧玉<sup>へきぎよく</sup>（黄玉石<sup>きだまいし</sup>）です。黒曜石は火山でできた天然ガラスで、石器の材料として最も好まれました。県内遺跡から出土する黒曜石については科学的に分析され、長野県和田峠周辺や八ヶ岳麦草峠付近の産が中心ですが、伊豆半島中央部の柏峠産や、伊豆七島の神津島産も見つかっています。泥岩は県南部、珪質頁岩は県北部、碧玉は伊豆半島や北関東などが産地と考えられています。



旧石器時代の人々は、石の性質をうまく利用して、石片の形や大きさなどが一定になるような石器の作り方を工夫していました。山梨県など東日本で多く用いられている特別な方法に「石刃技法<sup>せきじん</sup>」があります。石刃技法は、河原石や角・骨などで叩いて、まず平らな面をつくり、次にその面を規則的に叩いて、薄くて縦に長い石片「石刃」をつくり出します。

石刃の鋭い刃を一部に残し、周囲を切り取るように先のとがった形を整えた「ナイフ形石器<sup>がた</sup>」が日本列島の旧石器時代の代表的な石器で、槍の先につけて投げ槍として用いたと考えられています。石片や礫の全体を薄く剥ぐように加工して先のとがった木の葉のような形に仕上げた「槍先形尖頭器<sup>やりさきがたせんとうき</sup>」は、槍の先に付けたりナイフとして使われたのでしょうか。ほかに、道具作りに用いる骨や角を加工するための、石片に特殊な溝を付けた「彫器<sup>ちようき</sup>」や、皮なめしの道具で、石刃の一端に半円形をした厚い刃を付けた「搔器<sup>そうき</sup>」などがあります。また、旧石器時代にはオーストラリアと日本列島にしかみられない、刃の部分だけを磨いた「局部磨製石斧<sup>きよくふませいせきふ</sup>」もあります。木の加工や動物の解体に使われたとされています。

天神堂遺跡は、万沢小学校の校庭で4年生の男の子が1個の石器を拾ったことがきっかけで1970年に発見・発掘されました。校庭拡張部分から礫群7基と、礫群を中心としてナイフ形石器や槍先形尖頭器、石刃などの石器類が多量に発見され、約2万年前のムラの跡であるということがわかりました。近くの富士川の川原からこぶし大の石を運んできて、数十個集めて礫群をつくっています。礫は焼けていたり、黒くこげており、石蒸し焼き調理に使われたと考えられています。土器はまだなく、焼いたり生のまま食べるのが中心ですが、多くの人々が集まった時などに礫群を用いた石蒸し焼き料理も行われていました。



天神堂遺跡出土礫群

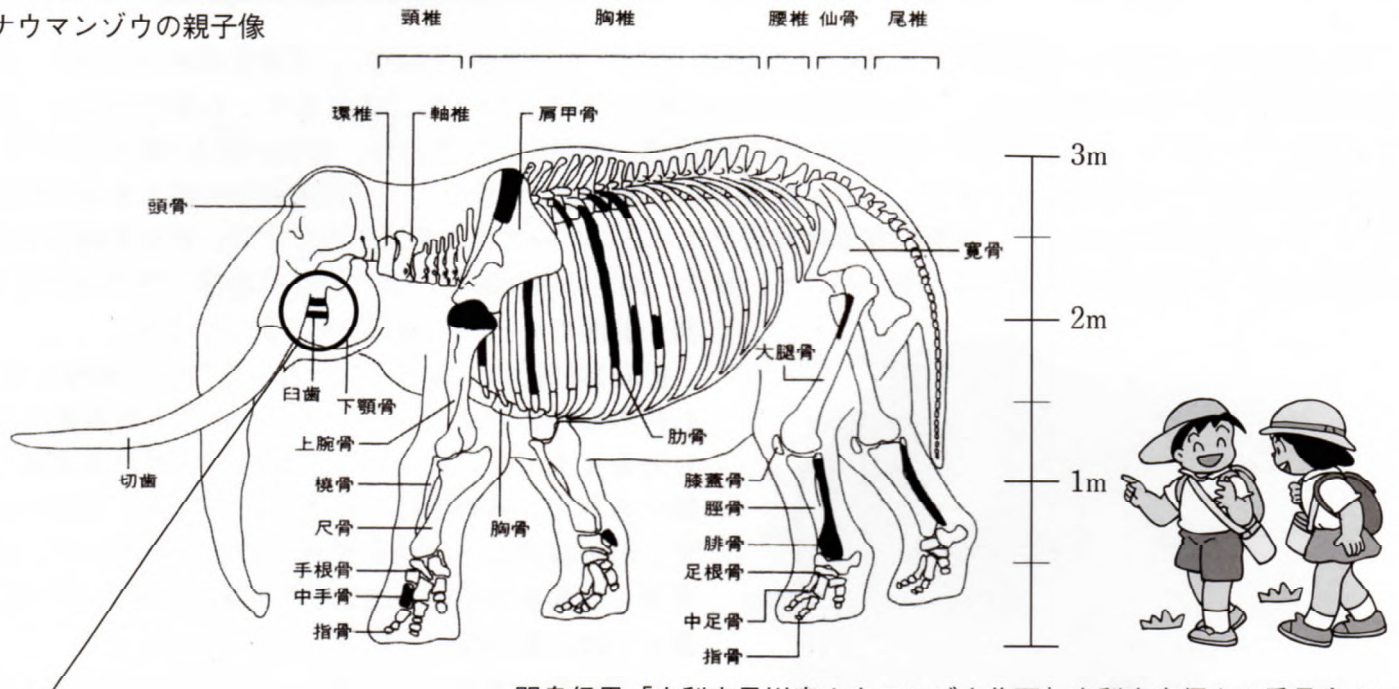
●旧石器時代の動物～ナウマンゾウの化石～



ナウマンゾウの親子像

名 前

ドイツの学者ナウマンさんが、はじめて日本で化石を発見したことから名づけられました。日本にナウマンゾウが生息していたのは、今から30万年～3万年くらい前まで。日本列島が大陸とつながっていたころ、大陸から渡ってきました。



臼 歯

臼歯(奥歯)は4本。でこぼこが平行にきざまれた石のよう。

牙

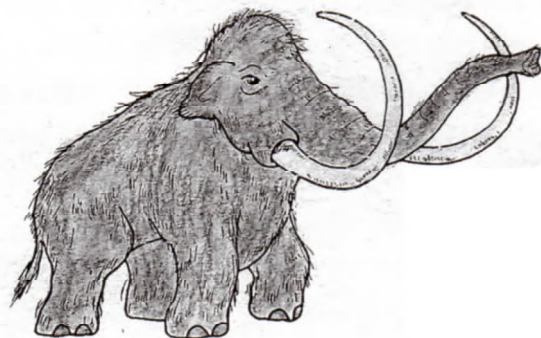
牙は人間の前歯に当たるものが2本長くのびたもの。2m以上もあり、太くて長く、大きく曲がっています。



兄川出土ナウマンゾウの臼歯

発見された場所

日本各地で発見。山梨県では山梨市兄川と甲府市相川で、臼歯などの化石が発見されました。長野県の野尻湖底からは骨などが大量に発見されています。旧石器時代の人々の貴重な食料でした。



ナウマンゾウ

●山梨から出土した黒曜石の石器 こくようせき

黒曜石は、火山で出来た自然ガラスです。割れると鋭い刃ができるので、切ったり刺したりする道具の材料としては最適でした。日本列島の旧石器時代では3万年前頃から使いはじめられ、ナイフ形石器や槍先形尖頭器などの石器の石材として利用されていました。縄文時代には、石鏃や石錐、石匙などの材料として広く使用されていました。弥生時代にも石鏃などの使用例があり、中期(2,000年前頃)まで使われ続けました。黒曜石の産地は、山梨県内にはありませんが、隣の長野県では諏訪湖の北側にある和田峠周辺で特に良質な黒曜石の産地があり、八ヶ岳北部の麦草峠周辺にも産地があります。また、神奈川県あまぎの箱根山、静岡県こうづしまの伊豆半島の天城山中にある柏峠、さらに伊豆七島の神津島(東京都)からも産出します。日本列島全体には、70カ所ほどの産地が知られ、北海道の白滝や、九州の佐賀県腰岳、大分県姫島などが有名です。山梨県内の縄文時代遺跡では、和田峠の黒曜石を中心に使用されているようですが、特に甲府盆地東部から県東部にかけては神津島や柏峠が少し使われています。しかし、箱根山の黒曜石は山梨ではほとんど使われていません。隣の静岡県では、ほとんどの縄文時代遺跡で神津島の黒曜石が多く使われています。



黒曜石原石



石鏃



石錐



石匙



黒曜石原産地 原図は 池谷信之氏(当館「研究紀要17」より)